

令和5年度の発掘調査成果

い・せ・きワールド in 前橋 2024

私たちが暮らす地面の下には、昔の人がどんな暮らしをしていたのかを伝えてくれる貴重な遺跡がたくさん眠っています。土木工事でむやみせず遺跡が壊される場合は、記録を残し未来へ引き継ぐために発掘調査を行っています。その調査成果の一部を紹介します。

祝「総社古墳群」国史跡指定！

指定年月日 令和6年2月21日

総社古墳群は、地域の首長層の墓制の遷り変わりやヤマト王権との関係を知ることができる重要な古墳群として史跡に指定されました。

遠見山古墳(5世紀後半)



総社二子山古墳(6世紀後半)



総社古墳群の中で最初に築造された大形古墳。古墳群のなり立ちを知るうえで重要。

後円部と前方部に横穴式石室がつくられ、上毛野地域と畿内のそれぞれの特徴をもつ。

総社古墳群の分布図（これより南東に王山古墳（前方後円墳・市史跡）がある。）

愛宕山古墳(7世紀前半)



宝塔山古墳(7世紀半ば)



蛇穴山古墳(7世紀後半)



巨石を積み上げた大きな石室の中には、畿内有力者の古墳に採用されるくり抜き式家形石棺が置かれる。

高度な石材加工技術と漆喰の使用。くり抜き式家形石棺の底面付近には格狭間（運を図案化したもの）の形が掘り込まれている。

高度な石材加工技術と漆喰の使用。入口の天井部分に格狭間状のくりこみがある。

史跡指定は日本の歴史を正しく理解する上で、欠かせない学術的価値をもつ重要なものを史跡として指定し、保存を図って後世に引き継ぐ制度。

古墳 古墳をお墓に再利用 愛宕山古墳

前橋市総社町周辺には6基の大きな古墳が残されています。これらの古墳は約200年間にわたって地域を治めた首長の墓と考えられています。

今年度は総社古墳群のうち約1400年前につくられた愛宕山古墳の南辺の調査を行いました。愛宕山古墳はこれまでの調査で1辺94mの堀で囲まれた方墳であることがわかっています。

今回の調査では、近代に墳丘の一部が削られてしまったため、南辺を明らかにすることはできませんでしたが、江戸時代に古墳の南側がお墓として利用されていたことがわかりました。また、お墓を調査するために深く掘り込んだことで、古墳の盛土を観察することができ、黄色い土や黒い土を交互に重ねて古墳をつくっていることがわかりました。



古墳南辺の調査の様子



古墳の盛土の様子

倉庫群を囲む区画溝と道路跡

今から千年以上前、群馬県が「上野国」とよばれていたころ、全国に「国府」という施設がつけられました。国府とは、現在の県庁のような役割をもっていた古代の役所です。「上野国府」は、元総社町にあったと考えられています。正確な位置はまだわかっていません。上野国府がどこにあったのかを解明するため、発掘調査を行っています。

令和5年度は、元総社町にある宮鍋神社の南側で調査を行いました。これまでの調査で、宮鍋神社の周辺からは税として納められた穀物などを保管するための倉庫群が見つかっています。今回の調査では、倉庫と考えられる礎石建物跡や、倉庫群の周りを囲む区画溝、区画溝の外から倉庫群へと入っていく道路跡などが確認されました。

区画溝と道路跡の交差部分
(西から撮影)区画溝と道路跡の交差部分
(南から撮影)

区画溝と道路跡の交差部分では、区画溝が少し埋まった上に道路が通る様子が確認できました。このことから、区画溝と道路は同時につくられたのではなく、道路のほうが後からつくられたということがわかりました。

古墳

元総社蒼海遺跡群 (150)

焼け落ちた竪穴建物

元総社町の宮鍋神社の南側で行った発掘調査では、古墳時代の集落跡が見つかりました。このあたりでは古代の役所に関連すると見られる倉庫群が見つっていますが、それらがつくられる前は、一般の人々が住む集落でした。今回の調査では、その集落の中に、火事で焼け落ちてしまったものと見られる竪穴建物跡を1軒発見しました。

5世紀末頃まで使われていたと考えられるこの竪穴建物跡の床は、焼けた屋根や壁などからできた灰や煤が一面に広がって黒くなっていました。火を受けたことでところどころ赤く変色している部分もあります。この建物跡からは土器がたくさん出土しており、ここに住んでいた人々が火事に驚いて置いていったものかもしれません。



焼けて炭となった木材(柱や梁?)



焼け焦げた床面や出土した土器

中世

元総社蒼海遺跡群 (91 街区) おみはいじ くかくみぞ おにがわら 小見麿寺の区画溝と鬼瓦

調査区中央で南北に走る中世の溝跡みぞあとが見つかりました。この遺跡の西側で見つかっている中世寺院「小見麿寺」の周りを囲む東側の区画溝くかくみぞと考えられます。小見麿寺は14世紀後半～16世紀頃まで存続したと考えられている寺院跡で、南と北の区画溝や基壇*状遺構が確認されています。

同じ区画溝が蒼海(150)でも見つかり、今回の調査結果とあわせると、東西100m、南北78mの広さをもつ寺院であったと推定されます。

溝跡からは多量の瓦かわが出土し、南都七大寺(奈良)の瓦に似たもので関東地方では類例の少ないものです。また、立体的な表現が際立つ鬼瓦おにがわらも出土しました。

こうしたことは、造営者と想定される上野国守護代の長尾氏の政治力の強さを物語っています。

* 建物の基礎として周辺より一段高く土盛りしたもの。寺院建築にみられる。



区画溝 (溝の中層から多量の瓦が出土)



出土した鬼瓦

しゃち瓦片しゃちがわが出土。小見麿寺では金箔きんぱくが施されたしゃち瓦片も出土しています。



中世

元総社蒼海遺跡群 (149) ちゆうせいおうみじょう 中世蒼海城の建物群

国府跡くにのしろあとに築造されたといわれている中世蒼海城本丸ほんまる北西付近の大規模な堀跡ほりあとが見つかりました。

その堀の東側には、堀底をさらった土を大規模に盛った跡もが確認され、その下からは掘立ほりたて柱建物跡はらたてものあととみられる多くの柱穴はしらあなや柵列さくれつ、井戸跡いどあとなどが見つかりました。複数の建物跡が重なり合って見つかることから、ひんぱんに城内の土地利用が変化していたと考えられます。



蒼海城堀跡 (北西から) 南方が本丸跡



掘立柱建物跡

令和5年度のおもな発掘調査地一覧・位置図

No.	遺跡名	所在地	時代
1	愛宕山古墳	総社町総社	古墳
2	推定上野国府跡	元総社町	奈良・平安
3	元総社蒼海遺跡群 (149) (150)	元総社町	古墳・奈良・平安・中世
4	西部第一落合遺跡群 (5)	元総社町	古墳・奈良・平安
5	鶴光路油免遺跡	鶴光路町	平安
6	南部拠点地区遺跡群No. 13	鶴光路町	平安



古墳 平安

せいふ たいいちおちあいに いせきてん
西部第一落合遺跡群(5)

古墳～平安時代の上野国府周辺の様子

北側の調査区では古墳時代の水田と畝の跡が見つかりました。牛池川沿いの低湿地で水田を営み、これより西側の台地部分で畝を耕作していたことがわかりました。

南側の調査区では古墳時代から平安時代にかけての竪穴建物跡が21軒見つかりました。建物内からは生活道具である土器のほか、高級食器の灰陶陶器や緑釉陶器などが出土しています。また当時の役人が使用した帯を飾った銅製の丸柄の破片も発見されました。

牛池川と築谷川に挟まれた落合地区ではこれまでの調査で奈良・平安時代の竪穴建物跡が多く見つかり、上野国府周辺に広がる集落跡と考えられます。



古墳時代の小区画水田跡（白線は水田のアゼ）

緑釉陶器

丸柄



南側調査区全景

平安

つるこうじ あひらめんに いせき なんぶきよてんちく いせきてん
鶴光路油免遺跡・南部拠点地区遺跡群No. 13

火山灰で埋まった平安時代末期の水田跡

古代の前橋南部地域一帯では、条里地割に基づく大規模な水田経営が行われていました。これらの水田は平安時代末期の天仁元(1108)年の浅間山の大噴火による軽石(浅間B軽石)で覆われており、今回の調査でも、この軽石の下から水田が見つかりました。

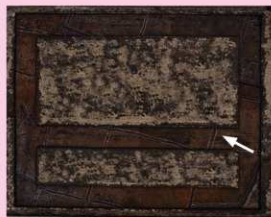
●鶴光路油免遺跡

条里水田は、1辺約109mの正方形(1坪)を基本単位としてつくられており、1坪の境を示す南北方向の大畦畔*1条を確認することができました。

●南部拠点地区遺跡群No. 13

調査区東側で南北にのびる溝が見つかりました。周辺の調査では中央に水路を持つ大畦畔が確認されており、その延長上に位置することから、大畦畔の中央の溝部分だけが残ったものと考えられます。

*畦畔・・・水田と水田の境に土を盛って、水が外に漏れないようにしたもの



鶴光路油免遺跡（矢印が大畦畔の跡）



南部拠点地区遺跡群No. 13（矢印が大畦畔の跡）

令和5年度の発掘調査成果 い・せ・きワールドin前橋2024
前橋市教育委員会事務局 文化財保護課/令和6年3月発行
住所：前橋市総社町三丁目11-4
電話：027-280-6511 FAX：027-251-1700
Eメール：bunkazai@city.maebashi.gunma.jp